

古墳時代の猿投窯関連資料の調査と検討 —陶邑窯との並行関係、蓋杯の系統を中心として—

Study of Sue ware in Sanage kiln site

—Especially concurrency with Sue ware in Suemura kiln site,
and genealogy of covered bowl—

大西遼
Ryo Onishi

はじめに

猿投窯は、これまで先学諸氏によって明らかにされてきたように（註1）、瀬戸や常滑といった今に続く愛知県の窯業の技術的母体となった極めて重要な窯業地である。そして、その黎明期である古墳時代の猿投窯の実態を明らかにすることは、愛知県の窯業史のみならず、愛知県の歴史・文化を解明する重要な研究課題であるといえる。

本稿は、古墳時代の猿投窯、およびその関連資料について、2015年度に行った資料調査の成果を報告し、若干の検討を行うものである。主な論点は、(1) 古墳時代後期後葉の猿投窯と陶邑窯の並行関係、(2) 古墳時代猿投窯の蓋杯の系統の2点である。

1. 古墳時代後期後葉の猿投窯と陶邑窯の並行関係をめぐって

古墳時代後期後葉の猿投窯と陶邑窯の並行関係については、尾野善裕（註2）や山田邦和（註3）の研究などがある。今回、資料調査によって、当期の猿投窯と陶邑窯の並行関係を考える上で有効と考えられる見解が得られたので報告を行う。

(1) H-44号窯出土の返り付蓋

図1は、今回調査を行ったH-44号窯出土資料である（註4）。図1-1～4は、古墳時代タイプの蓋杯（杯H）、図1-5は返り付蓋と考えられる個体、図1-6～8は、甑・鍋である。

ここで注目したいのが、図1-5の返り付蓋と考えられる個体である。返り付蓋は、猿投窯ではH-44号窯式に後続するH-50号窯式（註5）で出現すると考えられている。図1-5が杯身になる可能性も想定しえたが、検討の結果、図1-5は杯身ではなく返り付蓋に相当するという考えに至った。

図2は、H-44号窯出土の返り付蓋と考えられる個体（図1-5）と、その関連資料を提示したものである。以下前述のような考えに至った根拠を述べる。H-44号窯の蓋身は、図2-2・3のように図2-1よりも立ちあがり明らかに長く直立気味であることがまず挙げられる。また、口縁端部の仕上げにおいて、図2-2・3の杯身では内面に段または沈線（凹線）がめぐったり、やや厚みのある仕上

がりになったりするものが多いが、図2-1は先端にいくに従い相対的に薄くとがっていくような仕上がりとなる。

以上の点から、図2-1は返り付蓋と考えられるわけであるが、陶邑窯では返り付蓋の初限的な出土例としてTK 209号窯出土例が知られている(註6)(図2-4)。さらに、本格的に返り付蓋が出土するようになるのは、古墳時代タイプの杯身(杯H身)に対して、この時期新たに登場する箱型・無台の杯身(杯G身)の生産が本格化するTK 217型式期以降である(註7)(図2-5・6)。

このことから、返り付蓋の初限的形態の出現に着目すると、H-44号窯とTK 209型式が並行関係にあることの蓋然性はより高いものとなる。

なお、H-44号窯の杯身については、古墳時代タイプのもの(杯H身)しか知られておらず、H-50号窯式以降通有となる箱型・無台の杯身(杯G身)が登場する以前であったと考えられる。そのように考えると、図2-1に示したH-44号窯出土返り付蓋は、いかなる器種の蓋であったのかが問題となる。現状では、この時期既に登場している長頸瓶の蓋と考えておきたい。図2-1の口径からも、この想定は首肯できる。

(2) 知多郡武豊町山崎古墳出土須恵器

山崎古墳は、知多半島中央部東海岸に位置する古墳時代後期の横穴式石室墳であるが、石室内からまとまった量の須恵器が出土している。報告書によると、奥壁付近および玄室中央部に出土須恵器のまとまりがあり、奥壁付近のものに関しては、副葬時に片づけられたものであるという。しかし、出土須恵器に見られる型式差とそれらの出土地点では相関関係に齟齬があることから、須恵器の時期差が「追葬によって生じたものか副葬以前の使用期間の長さによるものかは明瞭ではない」としている(註8)。

図3は山崎古墳出土の蓋杯・有蓋高杯・脚付短頸壺である。図3-1~14の蓋杯および図3-15の高杯蓋は猿投窯系であり、時期的にはまとまりを持った資料群として捉えうる。蝮ヶ池窯およびH-44号窯出土蓋杯(図4-1~8)との共通性から、猿投窯編年では蝮ヶ池窯式~H-44号窯式に位置づけられる。どちらかと言われれば、蝮ヶ池窯式に近いと思われる。

一方図3-16~20の有蓋高杯・蓋は、陶邑窯系と考えられる一群である。陶邑窯では、6世紀後半代には杯蓋および高杯蓋の稜が消失するが(註9)、図3-16~18はその特徴をよく表している。図3-19・20の有蓋高杯についても、色調や焼成・胎土の様子などから図3-16~18に確実に伴うものであり、形態的特徴の上でも陶邑窯系として判断して良いと考えられる。

報告書では、この稜の消失している点をもって、追葬時か副葬以前の使用期間の差によるかは定かでないが、図3-1~6・15と図3-16~18には何かしらの時期差があるとしている。しかし、法量を含めた全体的なプロポーションには類似性が高く、むしろ同時期の系譜的な差異であると捉えるべきと考える。TK 43号窯(図4-9・10)およびTK 209号窯(図4-11~16)出土蓋杯との共通性から、時期的には、陶邑窯編年のTK 43型式~TK 209型式に位置づけられよう。

また図3-21の脚付碗は、「脚付短頸壺」、「脚付扁平広口埴」、「脚付盃類似高杯」などと呼ばれ、愛知県では三河湾岸沿いに特徴的に分布するが、伊勢の岸岡山古窯で生産されていたことが知られている(註10)。この図3-21および図3-16~20の有蓋高杯・蓋は、他の出土須恵器と比較して色調や焼成の様子が明らかに異なり、猿投窯および猿投窯系周辺窯とは異なる産地であることが容易に想定でき

る。また図3-21と図3-16～20を比較すると、色調・焼成の共通性が極めて高いことから、図3-16～20の有蓋高杯・蓋も伊勢地域の陶邑系須恵器窯から供給されたものである可能性が高い。

横穴式石室という出土遺構の性格上、追葬による出土品の共伴関係の認定には問題がついて回るが、以上述べた出土須恵器の特徴と先に述べた出土状況から、山崎古墳出土の須恵器に関してはある程度の一括性があるものと考えたい。そのように捉えた場合、猿投窯編年の蝮ヶ池窯式～H-44号窯式には、陶邑窯編年のTK43型式～TK209型式が並行するということが裏付けられることができる。

ただし、先にも述べた通り、当古墳出土の陶邑窯系須恵器は伊勢産である可能性が高く、あくまで陶邑窯“系”須恵器窯と猿投窯“系”須恵器窯の並行関係の一定点を示す資料にすぎないことを断っておく。しかしながら、このような定点を少しずつ増やしていくことで、猿投窯編年と陶邑窯編年の並行関係がより精緻なものとなっていくと考える。

(3) 南知多町北地5号墳出土須恵器

南知多町北地5号墳は、知多半島の先端部、日間賀島の東端に位置する。その立地とともに、横穴式石室や副葬品としての漁労具など、三河湾海浜部の古墳として注目すべき内容を持つ。須恵器としては、先の山崎古墳でも出土していた、伊勢岸岡山古窯産の脚付椀（写真5・6）が交流を示す遺物として注目されている（註11）。

北地5号墳出土須恵器には、ある程度の時期幅が存在し、追葬などの行為が容易に想像できる。そのため、时期的一括性に乏しく、先に述べた山崎古墳例のように各編年の並行関係を求めるような検討には不向きである。しかし、当古墳出土資料の中には複数産地の須恵器の存在が確認でき、古墳時代後期後葉の須恵器流通を考える上で非常に興味深い資料であるといえる。

ここでは、出土須恵器の法量や、先の山崎古墳出土例、これまでの先学諸氏の編年研究を参照した中で、かなり近い時期に副葬されたと考えられる4点を取り上げる（図5、写真1～4）。図5-1・2は、端部の仕上げ、杯蓋の稜の残存、杯蓋稜直上の段、杯身受部直下の段などをはじめとした全体的なプロポーション、胎土や焼成の様子などから、猿投窯系須恵器と考えられる（註12）。蝮ヶ池窯式期の所産と考えられる。また、図5-3・4は、端部の仕上げ、蓋杯の稜の消失をはじめとした全体的なプロポーション、胎土や焼成の様子などから、陶邑窯系須恵器と考えられる。TK43型式期～TK209型式期の所産と考えられる

さらに、図5-3・4は、同古墳から出土している岸岡山古窯産の脚付椀（写真5・6）と胎土や焼成の様子が類似することから、伊勢産の陶邑窯系須恵器の可能性が高いと考えられる。先の山崎古墳例と同様、同一古墳から猿投窯系須恵器と、伊勢産と考えられる陶邑窯系須恵器が出土していることは、知多半島における古墳時代の須恵器流通を考える上で示唆的な資料である。なお、当古墳からは、上記二つの産地と異なる胎土・焼成の須恵器も確認でき、さらに複数の産地から須恵器を入手していた可能性がある。これについては、今後の検討課題としたい。

(4) 小結

以上、H-44号窯、山崎古墳、北地5号墳出土須恵器の調査・検討から、①猿投窯編年の蝮ヶ池窯式～H-44号窯式が陶邑窯編年のTK43型式～TK209型式に並行すること、②古墳時代後期後葉の知多

半島では、猿投窯系須恵器と伊勢産の陶邑窯系須恵器が流通していたことを確認した。今後、より多くの事例を調査することで、蓋然性を高めていきたい。

2. 古墳時代猿投窯の蓋杯の系統

古墳時代猿投窯の蓋杯の系統については、拙稿において蓋杯の型式分類から若干の検討を行った（註13）。しかし、拙稿ではH-111号窯とH-10号窯という限られた資料の中での検討であったため、その系統の連続性に関しては未検討であった。ここでは、H-111号窯式からH-44号窯式の猿投窯の標識窯および標識窯以外の資料を検討し、蓋杯の系統の継続性を示したい。

(1) 古墳時代猿投窯の蓋杯の分類と系統

本稿では、蓋杯の型式分類について、基本的に拙稿（註14）で行った型式分類を用いる。以下、その概要を振り返る。

型式分類にあたって着目したのは、杯蓋の稜部直上と杯身受部直下の形態である。蓋杯において、杯蓋稜部周辺・杯身受部周辺は比較的遺存状態が良好なことが多いことから、複数窯での相互比較や数量的分析を行う上でも有効である。特に古墳時代の猿投窯系須恵器窯においては、決して資料が豊富にあるとはいえ、この点は大きな利点となる。

杯蓋については、稜部直上に段を有するもの（有段タイプ）と段を有さないもの（無段タイプ）の二つに分類する（図6）。杯身については、受部直下に段を有するもの（有段タイプ）と段を有さないもの（無段タイプ）の二つに分類する（図6）。その形態から、杯蓋有段タイプは杯身有段タイプに、杯蓋無段タイプは杯身無段タイプとセットになることが推察できる。なお、前稿では、H-10号窯の有段タイプについては、明確に段を有するものを有段Aタイプ、やや鈍い段を有するものを有段Bタイプと分類したが（註15）、本稿では他の窯跡出土資料も含めてより大局的な状況を把握するため、有段タイプに統括した。

調査の結果、猿投窯の標識窯（H-111号窯～H-44号窯）では、基本的には有段タイプと無段タイプの双方が存在することが分かった（図7）。5世紀から7世紀前葉にかけて、この2タイプが杯蓋・杯身において継続して存在することは、猿投窯においては、古墳時代を通して有段・無段という二つの系統が並存していたと考えることができる。

(2) 標識窯以外の窯跡出土資料による検討

以下、標識窯以外のH-7号窯・H-27号窯・H-39号窯・H-46号窯・H-73号窯出土資料について検討する（註16）。これらは表面採集資料であるという性格上、発掘調査の行われた資料と比較して資料的不安定性を有することは否めない。しかし、古墳時代の猿投窯においては、絶対的資料数の不足が研究上の問題点となっていると考えられ、資料的不安定性に注意を払いつつも、検討対象として扱う。

(A) H-7号窯（図8・図9）

図9はH-7号窯出土資料である。1・3は杯蓋、2・4・5は杯身、6は長脚一段三方透孔になると考

えられる高杯脚部である。2の杯身は、単体であればH-11号窯式に近い形態を有するが、3～5などの大型化した蓋杯を有する点、6の長脚高杯を有する点から、H-10号窯式並行に比定するのが妥当と考えられる。

3の杯蓋は有段タイプ、1の杯蓋は無段タイプ、2・5の杯身は有段タイプ、4の杯身は無段タイプである。

(B) H-27号窯 (図8・図10)

図10はH-27号窯出土資料である。1～4は杯蓋、5は長脚一段三方孔透孔になると考えられる高杯脚部である。

これまで荒木により公開されてきた当窯出土資料は7世紀に下るものであるのに対し(註17)、今回提示した資料は7世紀に下るとは考えがたい資料である。蓋杯の形態にはある程度まとまりがあり、概ねH-10号窯式並行と考えられる。荒木の報告でも、少数ながら当該期の特徴を持つ資料が見受けられ、近接し、時期の異なる2基の窯が存在した可能性がある。

1は無段タイプ、2は有段タイプの杯蓋である。

(C) H-39号窯 (図8・図11)

図11はH-39号窯出土資料である。1～4は杯蓋、5～8は杯身、9は無蓋高杯と考えられる小片、10は長脚一段三方透孔の高杯脚部、11は長脚二段三方透孔の高杯脚部である。

標識窯であるH-61号窯と近接する位置にあり、その時期的前後関係について近年注目された窯である(註18)。各器種の特徴から、おおむねH-10号窯式～H-61号窯式並行と考えられる。ただし、近接するH-61号窯の資料が混入している可能性もあり、注意を要する。

1は無段タイプ、3・4は有段タイプの杯蓋、5・7は無段タイプ、6・8は有段タイプの杯身である。

(D) H-46号窯 (図8・図12)

図12はH-46号窯出土資料である。1・2・4～6は杯蓋、3は杯身、7は有蓋高杯蓋、8は有蓋高杯の脚部、9は長脚一段三方透孔の高杯脚部、10は欠損部直下に段を有することから、長脚二段三方透孔になる可能性のある高杯脚部である。

これまで遺跡地図などでは、C-2号窯式とされている窯である。しかし、今回報告の資料はC-2号窯の時期に下げることは難しく、むしろH-10号窯式～蝮ヶ池窯式並行に大きくさかのぼるものと考えられる。H-46号窯のあった地点には、近接し時期の異なる2基の窯が存在した可能性がある。

1・2は有段タイプ、6は無段タイプの杯蓋、3は有段タイプの杯身である。

(E) H-73号窯 (図8・図13)

図13はH-73号窯出土資料である。1～3は杯蓋、4・5は平天井または平底となる、杯蓋または杯身、6は平底の杯身、7は有蓋高杯の脚部、8は長脚一段三方透孔の高杯脚部、9は長脚二段三方透孔の高杯脚部である。1は杯身である可能性もあるが、稜部が杯身の受部としては矮小であると判断し、本稿では杯蓋として扱う。

1972・1975年の遺跡地図(註19)と1981年以降の遺跡地図(註20)では、窯番号の付け替え整理の

ためか異なる窯となっている。1981年版ではH-230号窯（註21）を指すものとなっている（註22）。時期も1972年の遺跡地図では平安時代（註23）、1981年の遺跡地図ではI-17号窯式となっている（註24）。今回報告の資料は、そのどちらの時期にも所属せず、概ねH-10号窯式～蝮ヶ池窯式並行と考えられる。位置が特定できず難しい資料ではあるが、本資料の存在から当該期の窯が存在していた可能性は否定できない。

1は有段タイプ、2・3は無段タイプの杯蓋、6は有段タイプの杯身である。

(3) 小結

以上、標識窯および標識窯以外の窯資料について分析・検討を行った結果、古墳時代猿投窯の蓋杯については、有段タイプ・無段タイプの2系統が普遍的に並存するという様相が明らかになった。

なお、本稿で「有段タイプ」としたものは、すでに岩崎直也によって尾張型須恵器の特徴として指摘されている（註25）。以下、岩崎の指摘を引用する。「6（※筆者註：岩崎1987第3表の6）で注意したいのは、受部直下に一条の凹線が巡る点である。これ以後の8（※筆者註：岩崎1987第3表の8）以降の坏を見てみると、この部位が段として明確化してゆく過程が見て取れる。この段は、同時に蓋の稜上部にも顕在し、同五段階では明確化し、以後、当該地域の古墳時代タイプの蓋坏が終わりを遂げるまで留め続ける。そしてこの段とともに、坏では体部と底部の境界、蓋では天井部の頂部の境界が明瞭化し平坦となって、段とともに当該地域の蓋坏のメルクマールとして指摘できる。」

また浅田博造も、春日井市下原窯の報告の際に、有段タイプ・無段タイプにあたる型式も含め、杯蓋稜部周辺・杯身受部周辺の形態を細分し、主に製作技法についていくつかの記述をしている（註26）。ただし、このような岩崎や浅田の研究がある一方で、これを本格的に分析・検討していこうという動きはなかった。今後、この2系統について、より多角的な視点から本格的に分析・検討を行っていきたいと考えている。

おわりに

本稿では、古墳時代の猿投窯出土資料や古墳出土資料から、(1)古墳時代後期後葉の猿投窯と陶邑窯の並行関係、(2)古墳時代猿投窯の蓋杯の系統という2つの論点を扱った。(1)については、知多半島における古墳時代後期の須恵器流通の一端についても触れることができた。今後、より多くの事例を集めることで、並行関係のより精密な検討はもちろんのこと、流通の問題についてもアプローチしていきたい。

(2)については、前稿（註27）において抽出した有段タイプ・無段タイプという2系統に関して、古墳時代を通じた普遍的な継続性を明らかにすることができた。今後は、猿投窯外の猿投窯系須恵器窯も含めて、より詳細な検討を重ねていきたい。

付：尾張旭市城山窯出土資料の調査

2015年度には、猿投窯系須恵器窯である尾張旭市城山窯出土資料の調査も実施した。本稿ではその詳細について触れることができなかったが、調査成果の一部として、作成した実測図を提示する（図14）。これについては、今後改めて分析・検討を行い、別稿に期したい。

謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方々・機関からご協力・ご助言をいただきました。ご芳名を記して深謝申し上げます。

荒木正直、伊藤誠一郎、伊藤正人、井上喜久男、岡千明、尾野善裕、梶原義実、加藤有理香、神取龍生、木村光一、定森秀夫、柴垣勇夫、杉本真由、中井均、中川永、林正信、早野浩二、藤井康隆、森泰通、荒木集成館、尾張旭市教育委員会、名古屋市教育委員会、名古屋東アジア史研究会、武豊町歴史民俗資料館、三河考古学談話会、南知多町教育委員会

[註]

- (1) 猿投窯の調査・研究には膨大な蓄積があり、本稿で扱う古墳時代に限ってもかなりの数に上る。

これらの研究史に関しては、改めて詳述したいと考えている。なお、2015年には、『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系が刊行され、研究の現段階での到達点が示されている。

愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。

- (2) 尾野善裕 1997「尾張・西三河（窯跡） 猿投・尾北・その他」『古代の土器5－1 7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会 など。
- (3) 山田邦和 1982「須恵器・その地域性」『同志社大学考古学シリーズⅠ 考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- (4) 今回、H－44号窯出土資料の調査では、名古屋市教育委員会所蔵資料と愛知県陶磁美術館保管資料を扱った。
- (5) 齊藤孝正 1988「猿投窯第三期杯類の型式編年」『名古屋大学総合研究資料館報告』第4号 名古屋大学総合研究資料館。

齊藤孝正 1995「Ⅰ東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第3巻 東日本編Ⅰ 雄山閣。

榑崎彰一 1966『陶器全集』第31巻 猿投窯 平凡社。

榑崎彰一・齊藤孝正 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）（尾北地区・三河地区）』愛知県教育委員会。

なお、H－15窯式を設定して、返り付蓋の出現を当期に充てる考えも近年増加している。以下のような研究がある。

尾野善裕 1997（註(2)文献）。

尾野善裕 2000「猿投窯（系）須恵器編年の再構築」『第1回東海土器研究会 須恵器生産の出現から消滅 猿投窯・湖西窯編年の再考地区』東海土器研究会。

城ヶ谷和広 2015「編年論 須恵器」『愛知県史』別編 窯業1 古代 猿投系 愛知県。

- (6) 田辺昭三 1965『陶邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ。
- (7) 同上。
- (8) 磯部幸男・中野晴久ほか 1984『山崎古墳』武豊町教育委員会。
- (9) 註 (6) 文献 など。
- (10) 中野晴久 1993「脚付扁平広口埴考～須恵器における地域性の考察～」『知多古文化研究』7 知多古文化研究会。
久永春男ほか 1988『藤原古墳群』渥美町教育委員会。
- (11) 早野浩二 2005「北地古墳群」『愛知県史』資料編 3 考古 3 古墳 愛知県。
- (12) 古墳時代においては、猿投窯系の窯が尾張旭市城山窯や同卓ヶ洞窯、春日井市下原窯、豊田市上向イ田窯のように、猿投窯外でも展開した。ここでは、こうした猿投窯外における猿投窯系の窯の製品である可能性も考慮し、猿投窯系須恵器としておく。
- (13) 大西遼 2015「東山 111 号窯・東山 10 号窯出土資料の調査と予察一蓋杯の系統と複数器種におよぶ細部形状の共通性を中心に一」『愛知県陶磁美術館 研究紀要』20 愛知県陶磁美術館。
- (14) 同上。
- (15) 同上。
- (16) ここで検討する 5 窯については、愛知県陶磁美術館保管資料を対象とした。
- (17) 荒木実 1990「東山 (H) 27 号窯」『古代人』第 51 号 名古屋考古学会。
荒木実 1992「東山 (H) 27 号のⅢ」『古代人』第 53 号 名古屋考古学会。
- (18) 尾野善裕 2010「Ⅶ 考察—H— 61 号窯の調査をめぐる諸問題—」『東山 61 号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室。
- (19) 愛知県教育委員会 1972『愛知県遺跡分布図』愛知県教育委員会。
文化庁文化財保護部 1975『全国遺跡地図 23 愛知県』財団法人国土地理協会。
- (20) 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系 愛知県。
榑崎彰一・齋藤孝正 1981『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告 (Ⅱ)』愛知県教育委員会。
- (21) 岡村孝二 1978「名城大学第 2 グランド横の古窯址 (H230 号)」『古代人』第 34 号 名古屋考古学会。
- (22) 註 (20) 榑崎・齋藤 1981。
- (23) 註 (19) 愛知県教育委員会 1972。
- (24) 註 (20) 榑崎・齋藤 1981。
- (25) 岩崎直也 1987「尾張型須恵器の提唱」『信濃』第 39 巻第 4 号 信濃史学会。
- (26) 浅田博造 2006『下原古窯跡群』春日井市教育委員会。
- (27) 註 (13)。

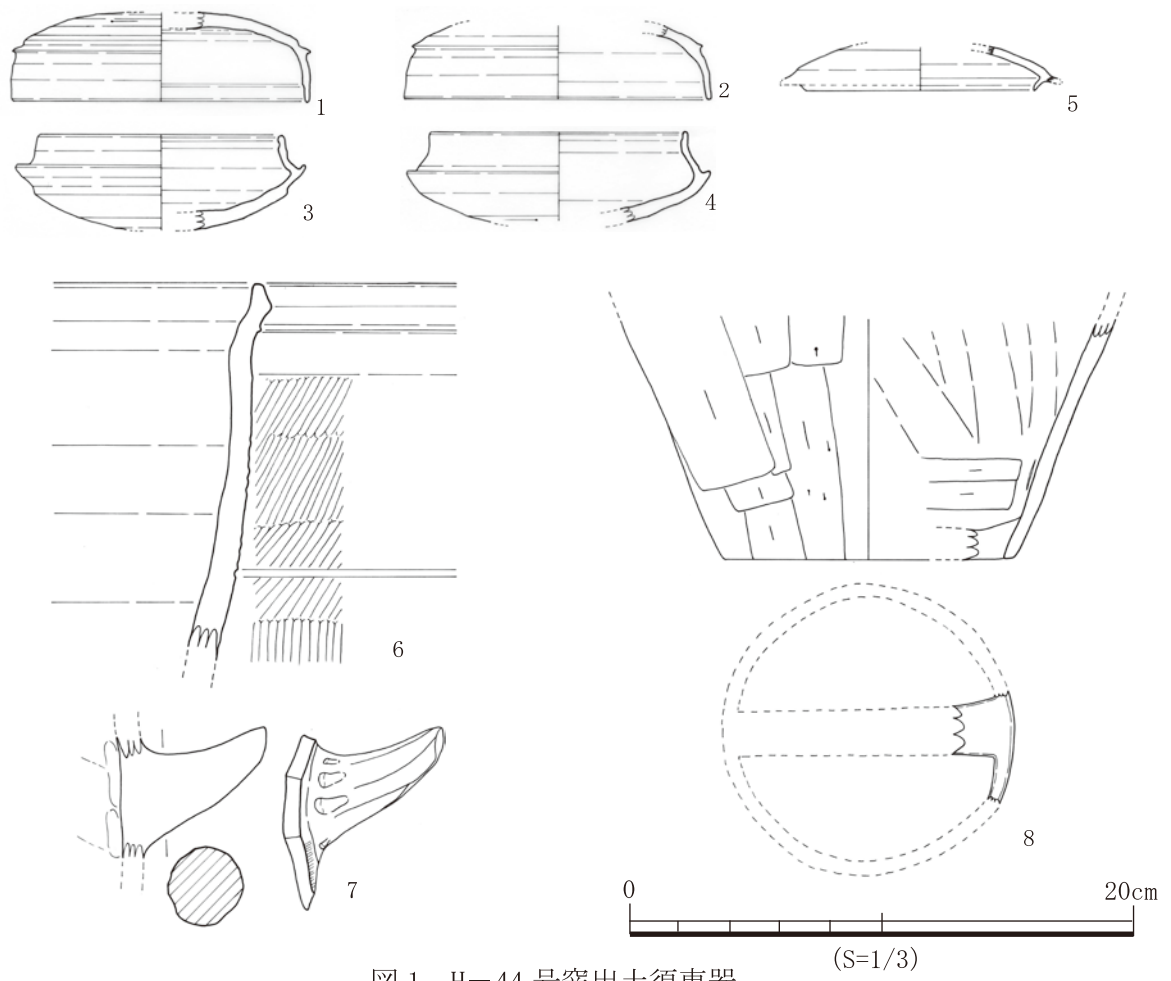


図1 H-44号窯出土須恵器

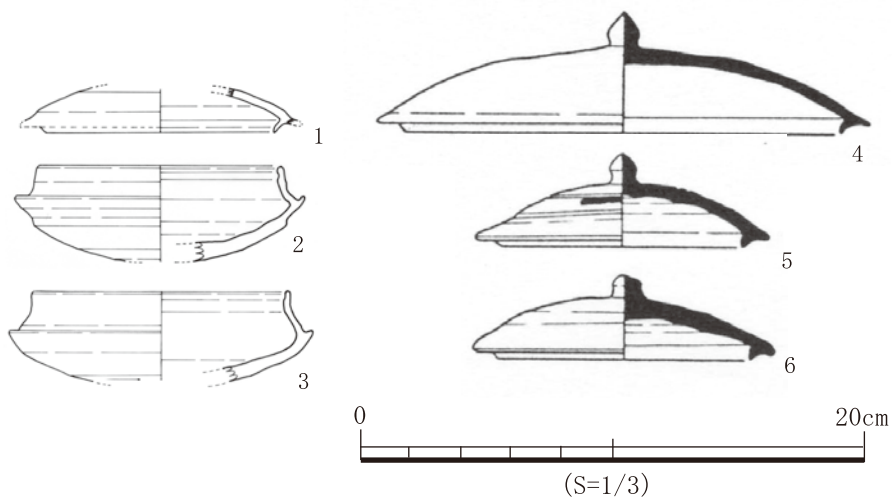


図2 H-44号窯における返り付蓋と関連資料

1～3：H-44号窯 4：TK209号窯（田辺1965）、5・6：TK217号窯（田辺1965）

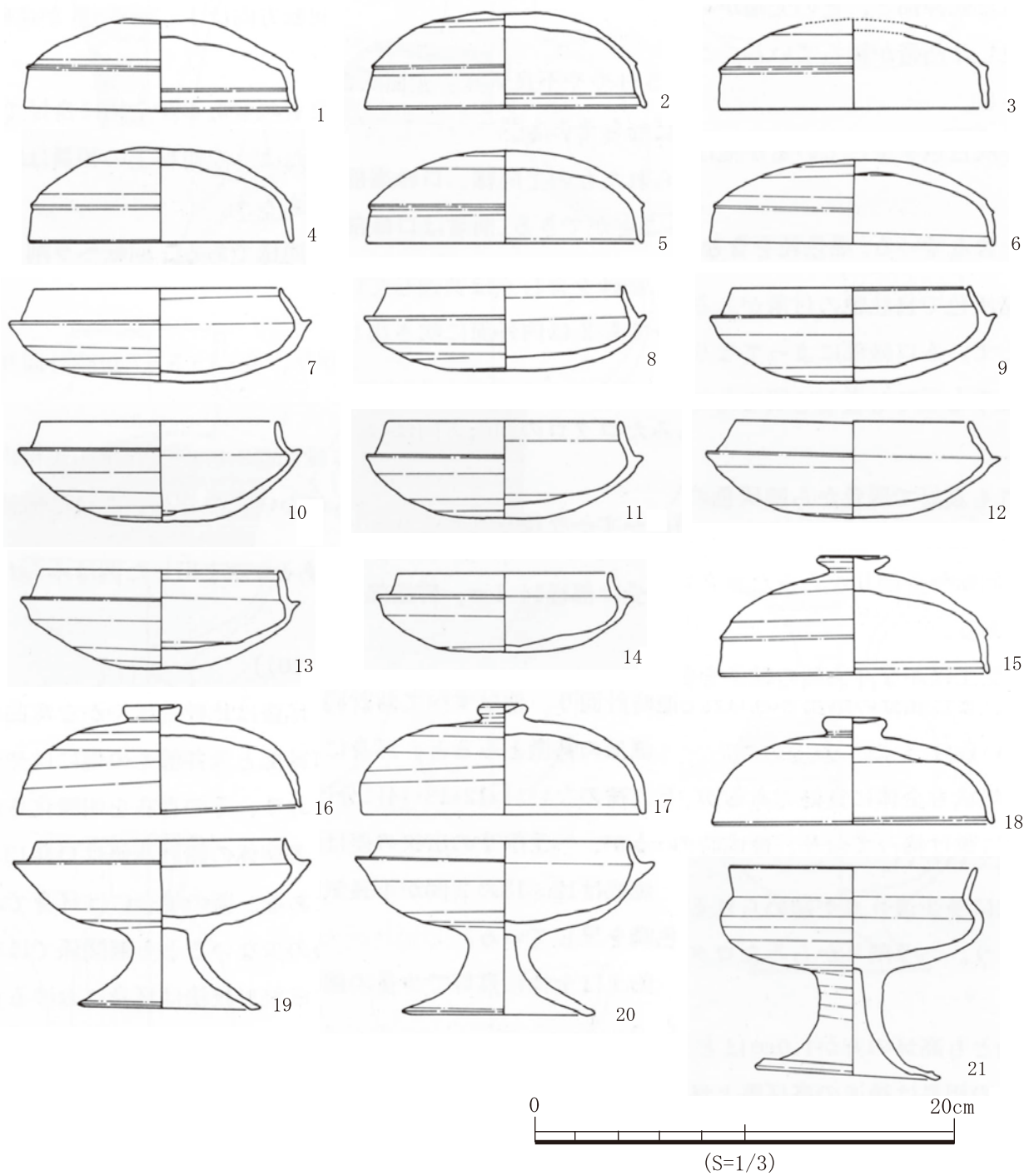


図3 知多郡武豊町山崎古墳出土須恵器 (磯部・中野ほか 1984)

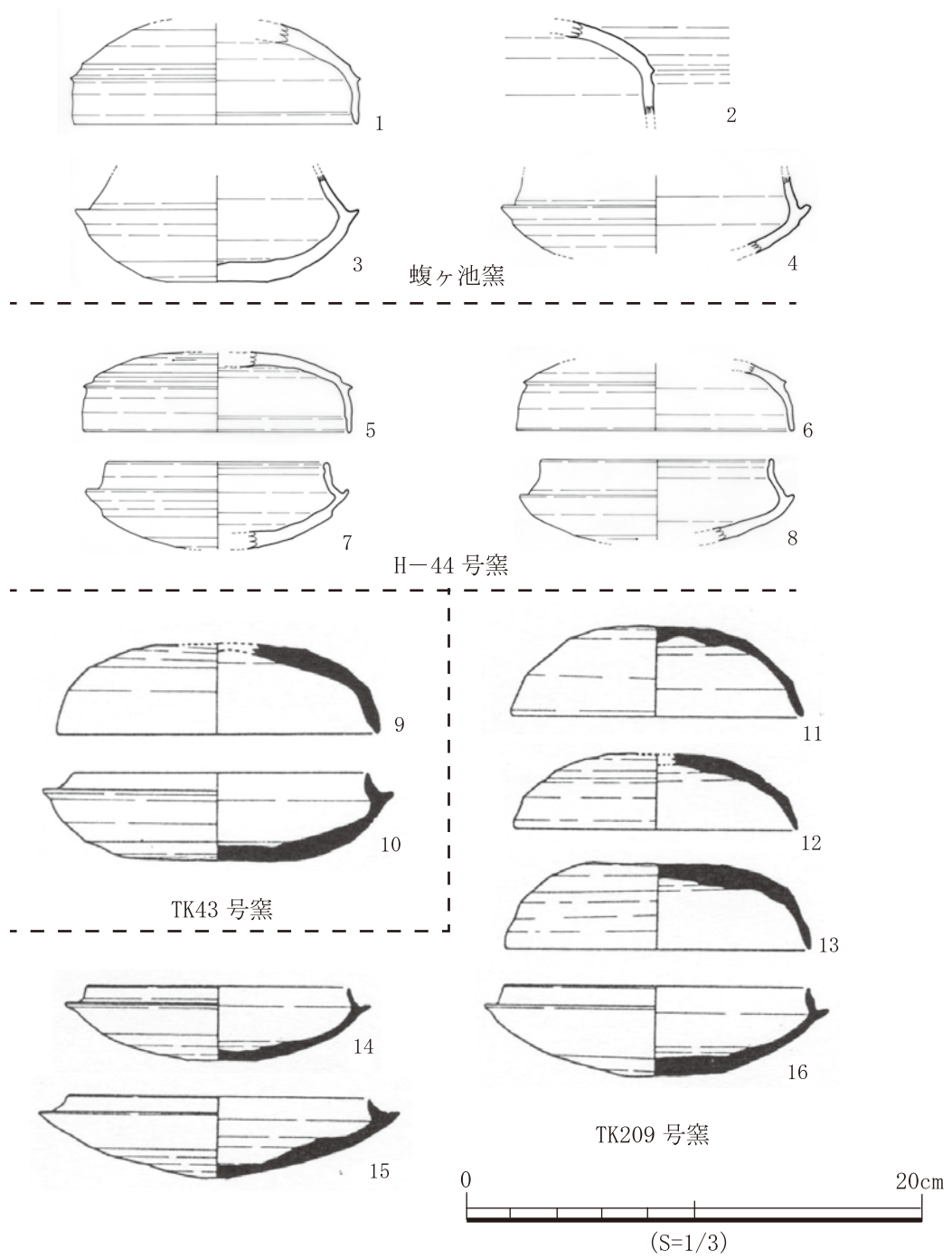


図4 6世紀後半から7世紀初頭の猿投窯・陶邑窯の標識資料 (9～16: 田辺 1965)

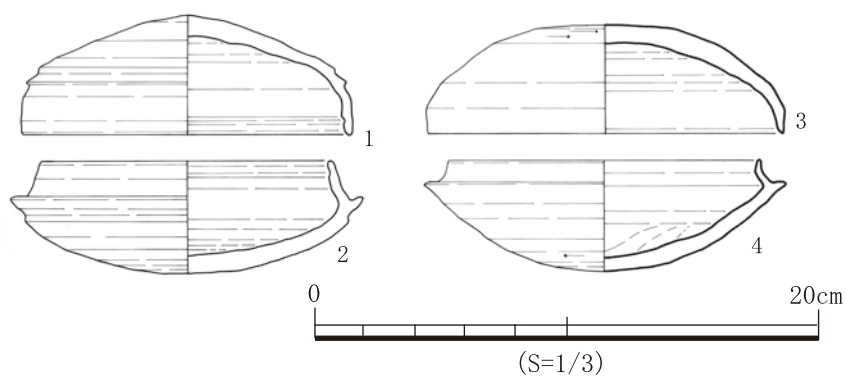


図5 知多郡南知多町北地5号墳出土須恵器



写真1 図6-1の杯蓋



写真2 図6-2の杯身



写真3 図6-3の杯蓋



写真4 図6-4の杯身



写真5 北地5号墳出土脚付碗(1)



写真6 北地5号墳出土脚付碗(2)

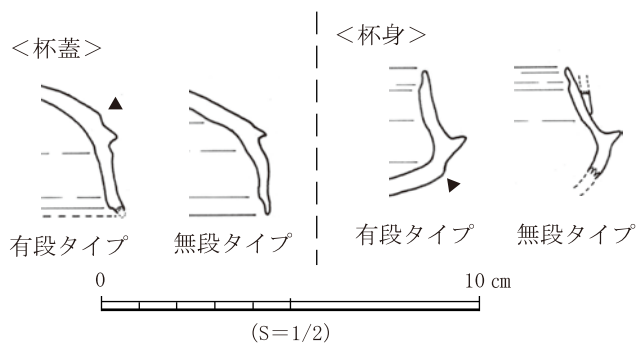


図6 須恵器蓋杯の型式分類(大西2015を改変)

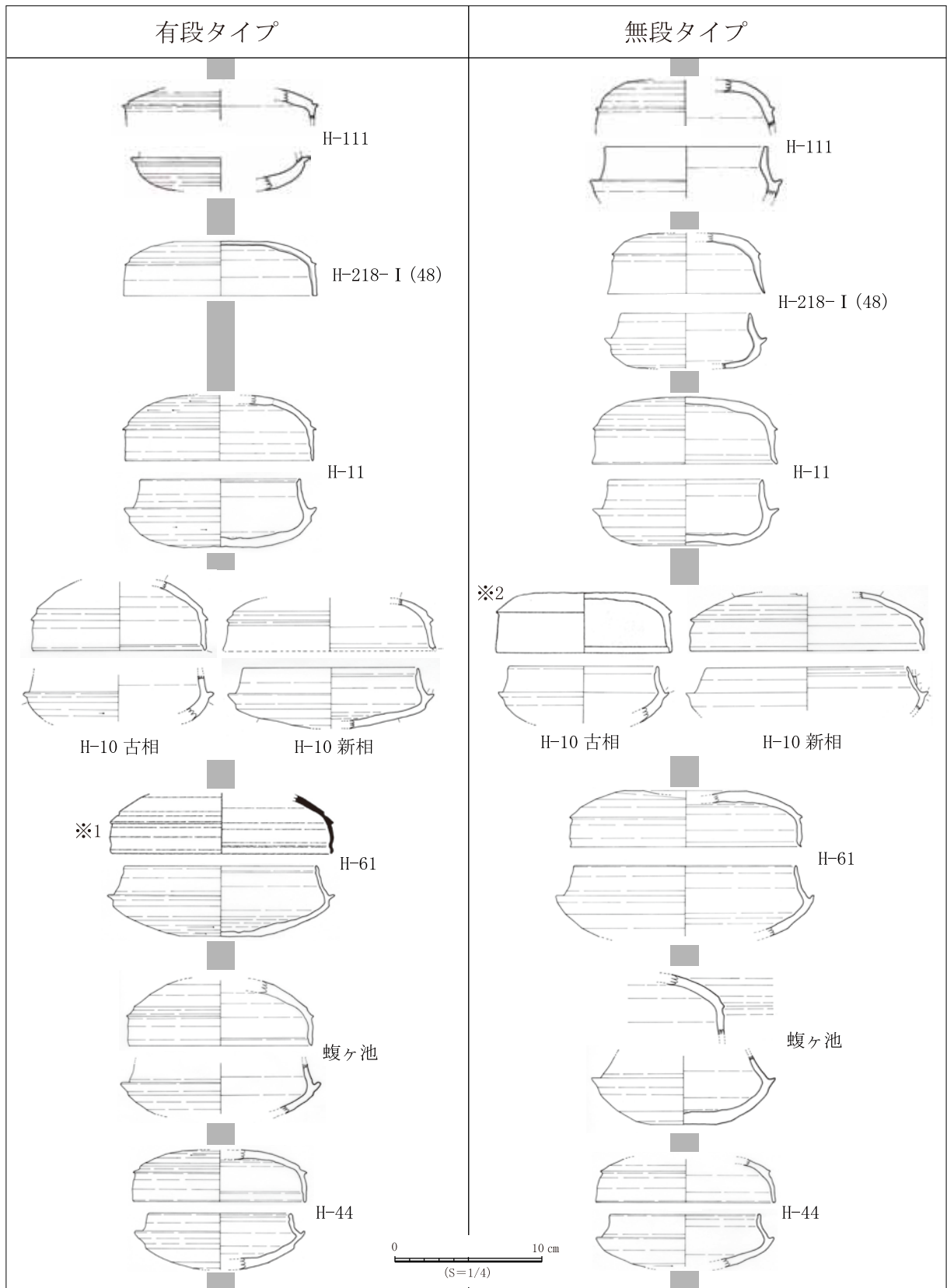


図7 古墳時代における猿投窯産須恵器蓋杯の2系統

※1：尾野善裕・梶原義実ほか 2010『東山61号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室

※2：荒木実 1974「東山10号古窯址の遺物」『古代人』第30号 名古屋考古学会

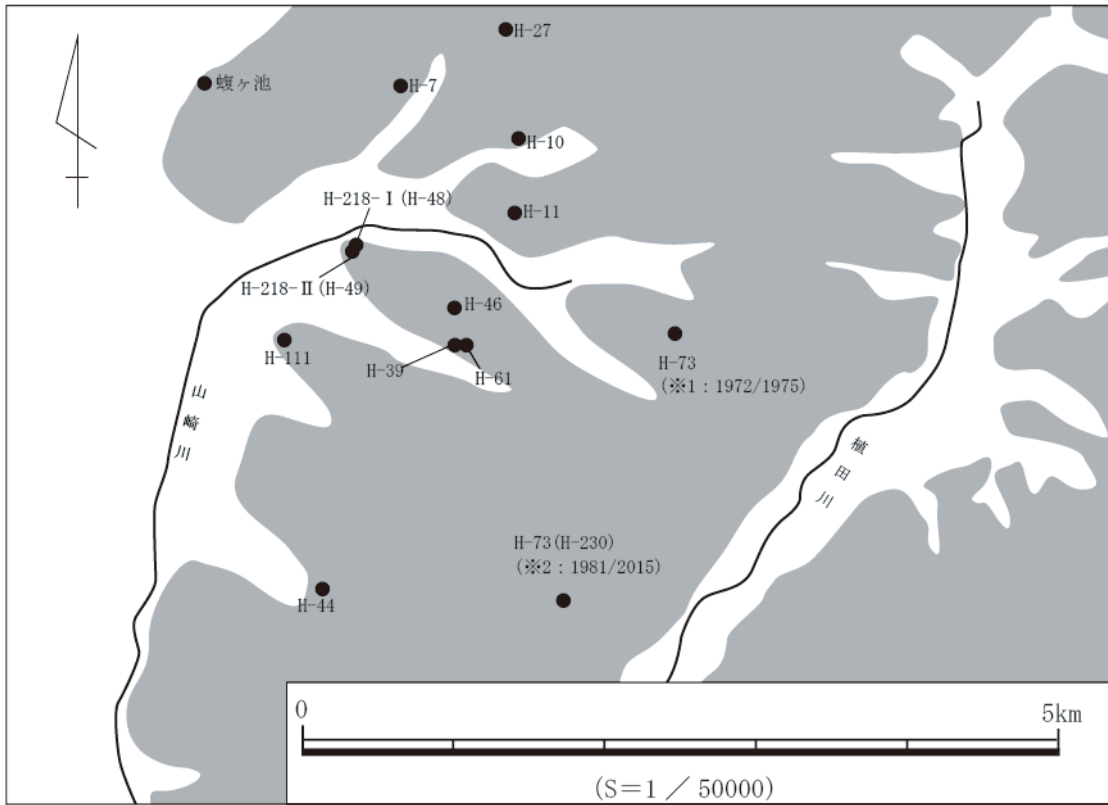


図8 猿投窯における古墳時代の窯跡の位置（本稿で触れるものに限る）

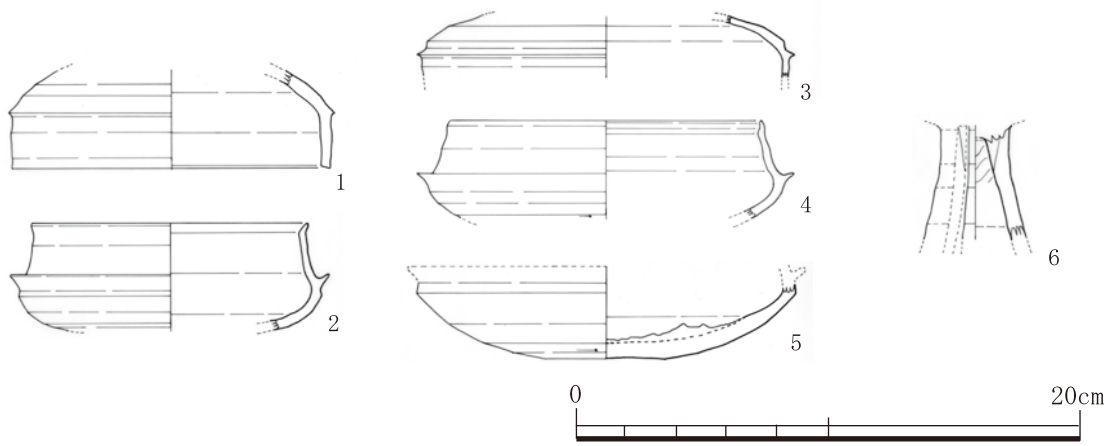


図9 H-7号窯出土須恵器 (S=1/3)

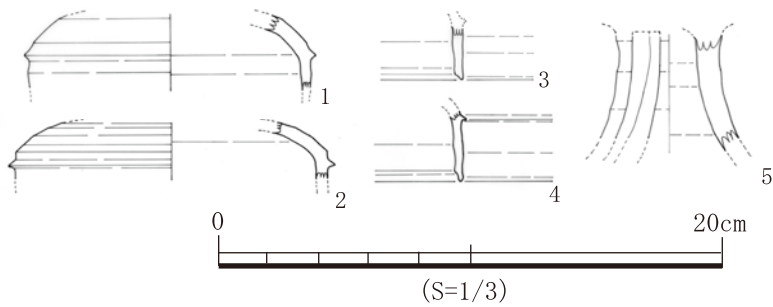


図10 H-27号窯出土須恵器

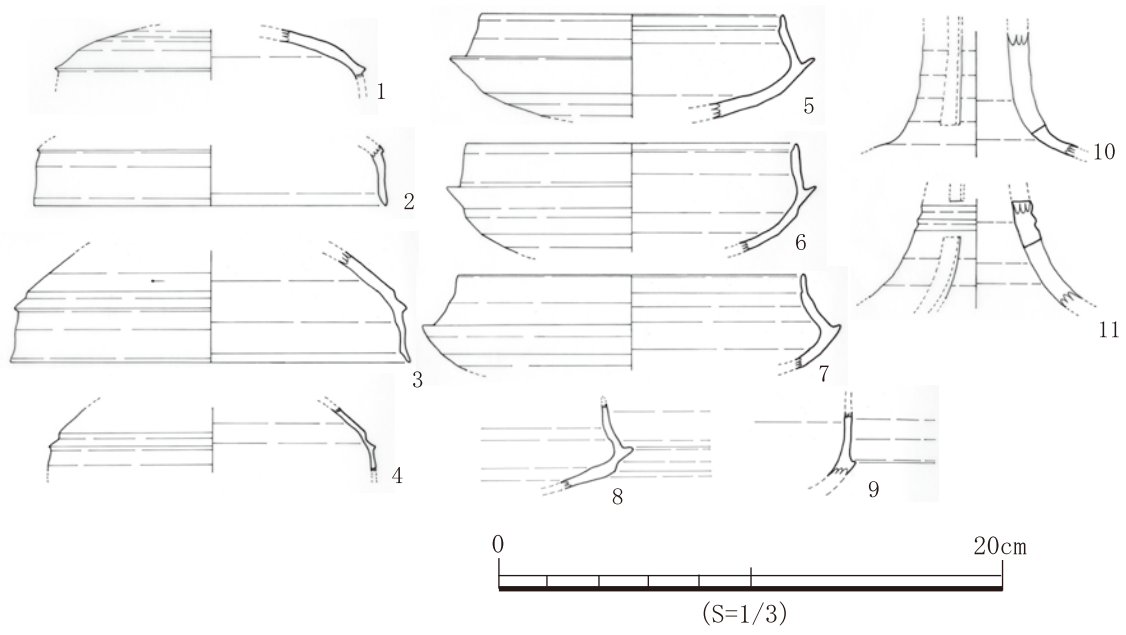


图 11 H-39 号窑出土须惠器

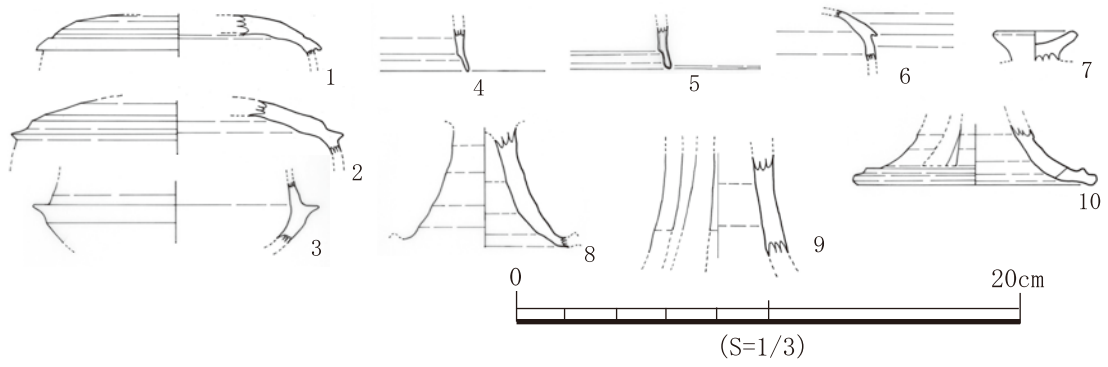


图 12 H-46 号窑出土须惠器

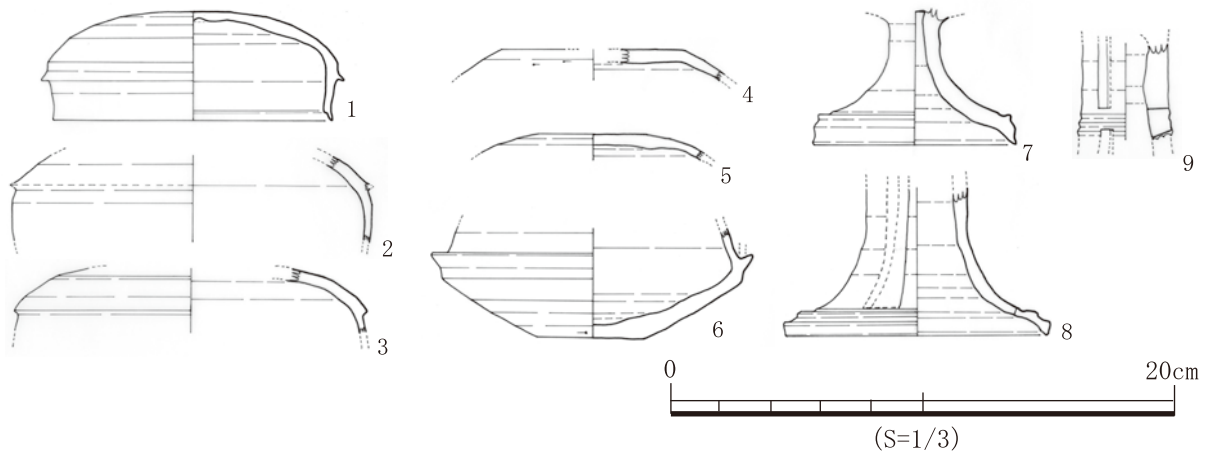


图 13 H-73 号窑出土须惠器

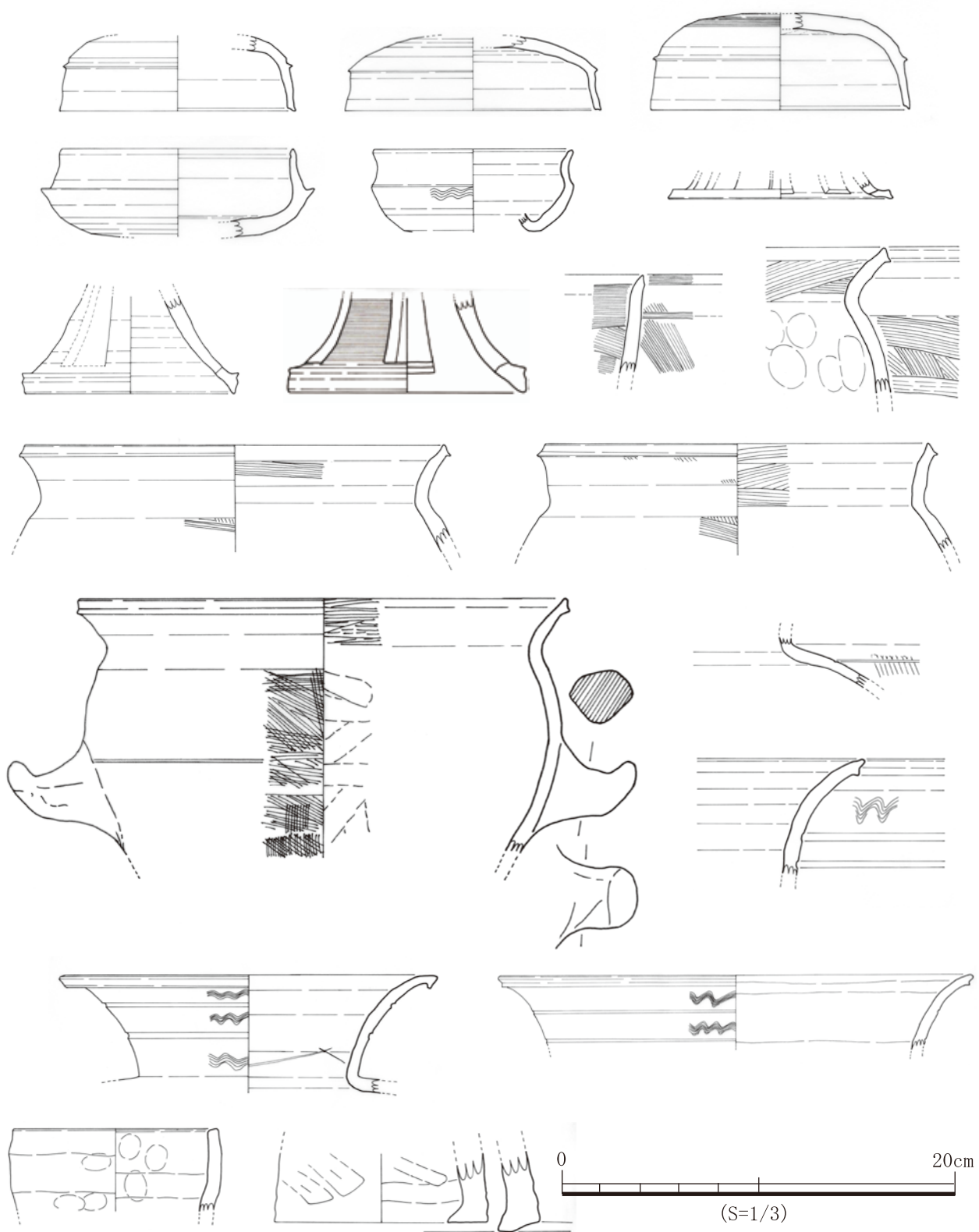


图 14 尾張旭市城山窯出土須恵器